春日井市松河戸遺跡ＳＤ120について

後藤 浩一・神谷 友和

１．はじめに

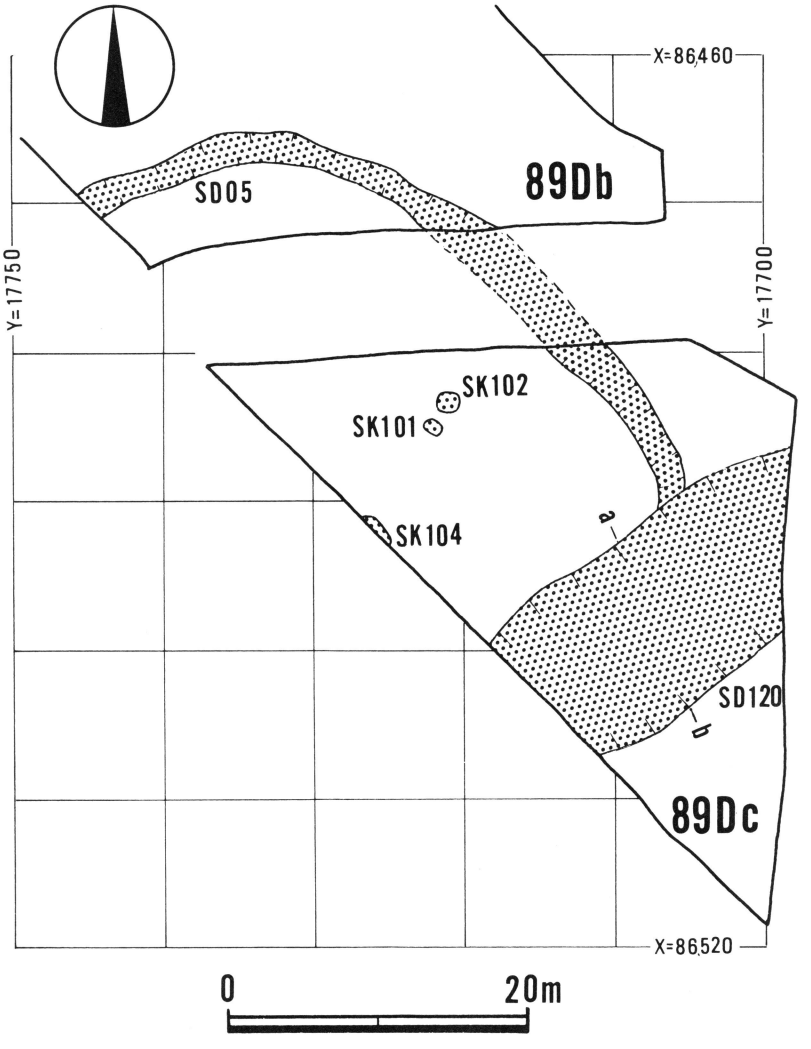
松河戸遺跡は、名古屋市北東に接する春日井市南西部の松河戸町（第１図）に所在し、地理的には尾張平野の南半部を西へ流れる庄内川中流域の右岸に広がる沖積地(標高約13～14m）に立地する。これまでの調査により、水田遺構（室町時代後半～江戸時代）の下層の微高地より縄文時代早期末から後期にかけての遺物・遺構等が数ヵ所確認されている。また、縄文時代中期にさかのぼる埋積浅谷も確認され、縄文時代以後の微地形が明らかになりつつある。

今回調査した89Ｄｃ区（第２図）で、検出されたＳＤ120より出土した縄文時代晩期・弥生時代前期の土器は当遺跡周辺では初例である。本稿では、これらの土器を紹介するとともに、松河戸遺跡周辺の縄文時代から弥生時代にかけての遺跡の動向についても考えていきたい。

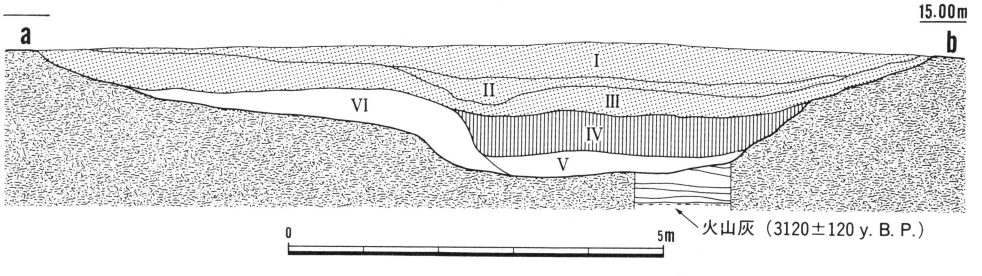
２．ＳＤ120の概要

ＳＤ120（第３図）は、弥生時代・中世の時期の遺構がのる黄灰色シルト層の微高地を掘り込んだ幅約12m・深さ約1.8mの東北～南西方向に走る埋積浅谷と考えられる。ＳＤ120上

第１図　松河戸遺跡位置図（１：50000）



第２図　89Db・Dc区遺構配置図



第３図　ＳＤ120東壁断面図

層は北西方向に円弧状に伸びるＳＤ05とつながる。ＳＤ120とＳＤ05に囲まれた地区に土坑３基（ＳＫ101・102・104）が存在し、埋土内から弥生時代前期の土器が出土し、その頃にこの地区に集落が形成されていたと考えられ、弥生集落とＳＤ120は密接な関係を有していたと思われる。

ＳＤ120の基本層序を大きく４層に分けて説明する。第Ⅰ層は暗灰褐色シルト・第Ⅱ層が暗灰褐色粘質土・第Ⅲ層が第Ⅱ層の直下で青灰色粗砂となり、南北両端では暗青灰色シルトとなる。以上の３層が弥生時代前期の土器（第５～７図）を包含する層（ＳＤ120上層）であり、幅約12ｍ・深さ約１ｍを測る。土器以外に磨製石剣が出土した。第Ⅳ層は木本質泥炭層であり、流木やクルミ・ヒョウタン・クリ等の自然遺物を多量に含み、幅約４ｍ・深さ約50cmであり、第Ⅴ層は掃流河床堆積物である白色粗砂で、厚く堆積する箇所もみられる。以上の２層がＳＤ120下層で、縄文時代晩期後半の土器（第４図）は、泥炭層と白色粗砂の境界付近で出土したものが大半であった。土器以外に、丸木弓２点・木製品・打製石斧も出土した。

なお、ＳＤ120第Ⅴ層の約40cm下より縄文時代後期と晩期の境界付近に降灰したと考えられる火山灰（3120±120y.B.P.）[1]が検出されており、ＳＤ120は縄文時代晩期に形成された埋積浅谷の可能性が高い。

３．ＳＤ120下層出土の土器（第４図）

壺（１）　口径18cmの大形で頸部と胴部の境界に屈折部をもち、口縁部は内傾し狭くすぼまり胴部は大きく張る。口縁部外面に研磨を加え、胴部以下に横位の条痕を施す。内面は横の条痕調整の後、なでを施す。

深鉢（２）　口径37cmの大形で、口縁部は素文で外面は横位条痕を施し、やや胴部が張る器形である。内面はなでを施す。

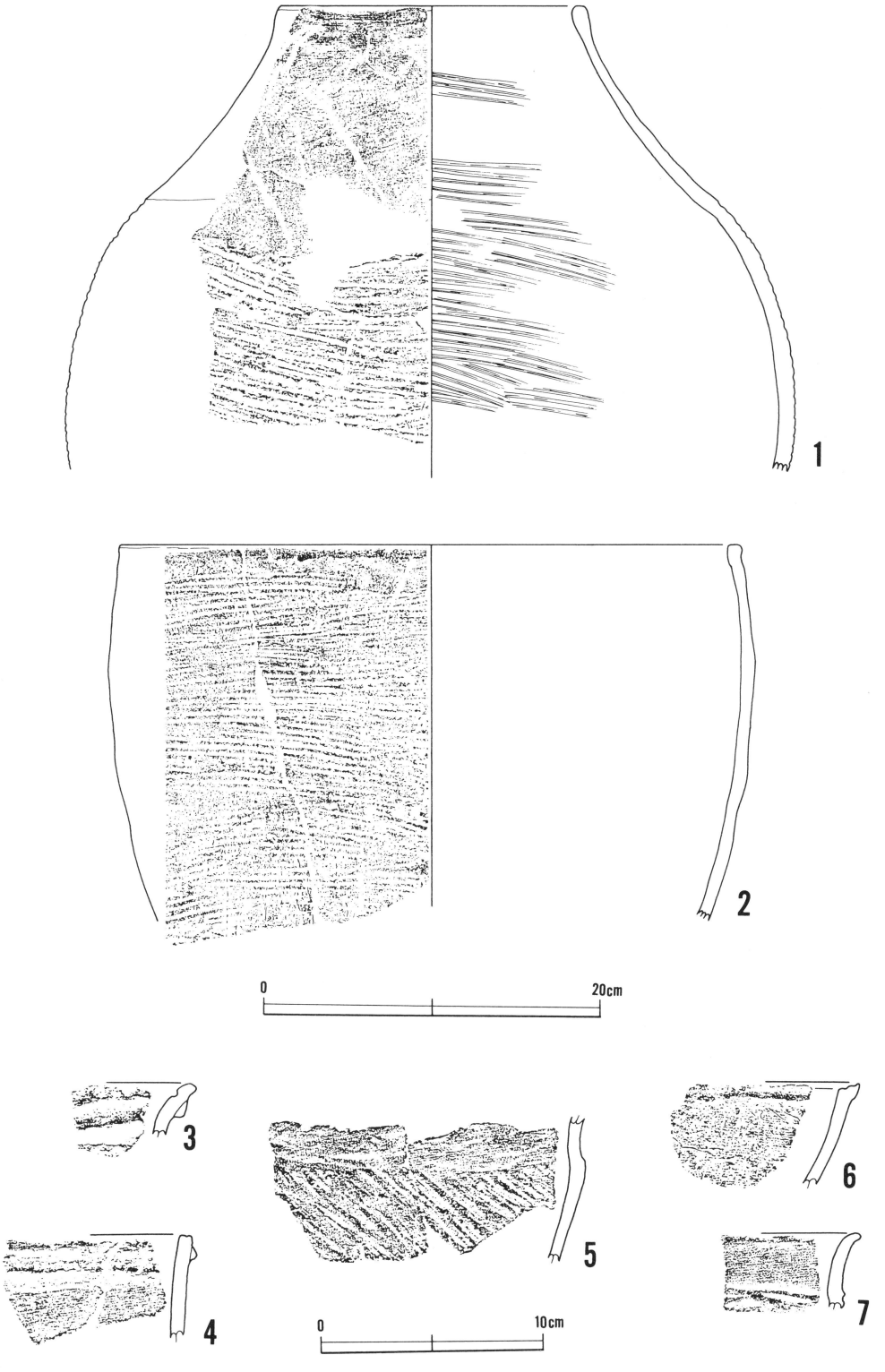
甕（３～５）　３は断面三角形の素文凸帯をもち、口縁部は外反し内面に沈線を施す。４は素文凸帯を有し、凸帯上部に浅い沈線を施す。凸帯下部は横なでを施す。５は頸部と胴部に段をもち、胴部は右下がりの条痕調整を施す。

浅鉢（６・７）　６は口縁部を肥厚させ、端面に２条の沈線を施す。内面は研磨されている。７は外反する口縁部で肩部が屈折し、その屈折部に長楕円の浮線文を施す。大洞Ａ系統の土器と考えられる。

これらの一群の土器は、愛知県一宮市の馬見塚Ｆ地点[2]出土の土器に類似する特徴をもち、五貫森式に比定される。

４．ＳＤ120上層出土の土器（第５～７図）

弥生時代前期の土器が大量に出土し、遠賀川系土器と条痕文系土器の割合はほぼ半々で



第４図　ＳＤ120下層出土の縄文土器

ある。第Ⅰ層～第Ⅲ層にかけて出土し、層位で時期の細分ができるほどの内容は持っていないように考えられるので、まとめて一括資料として扱っていくことにする。

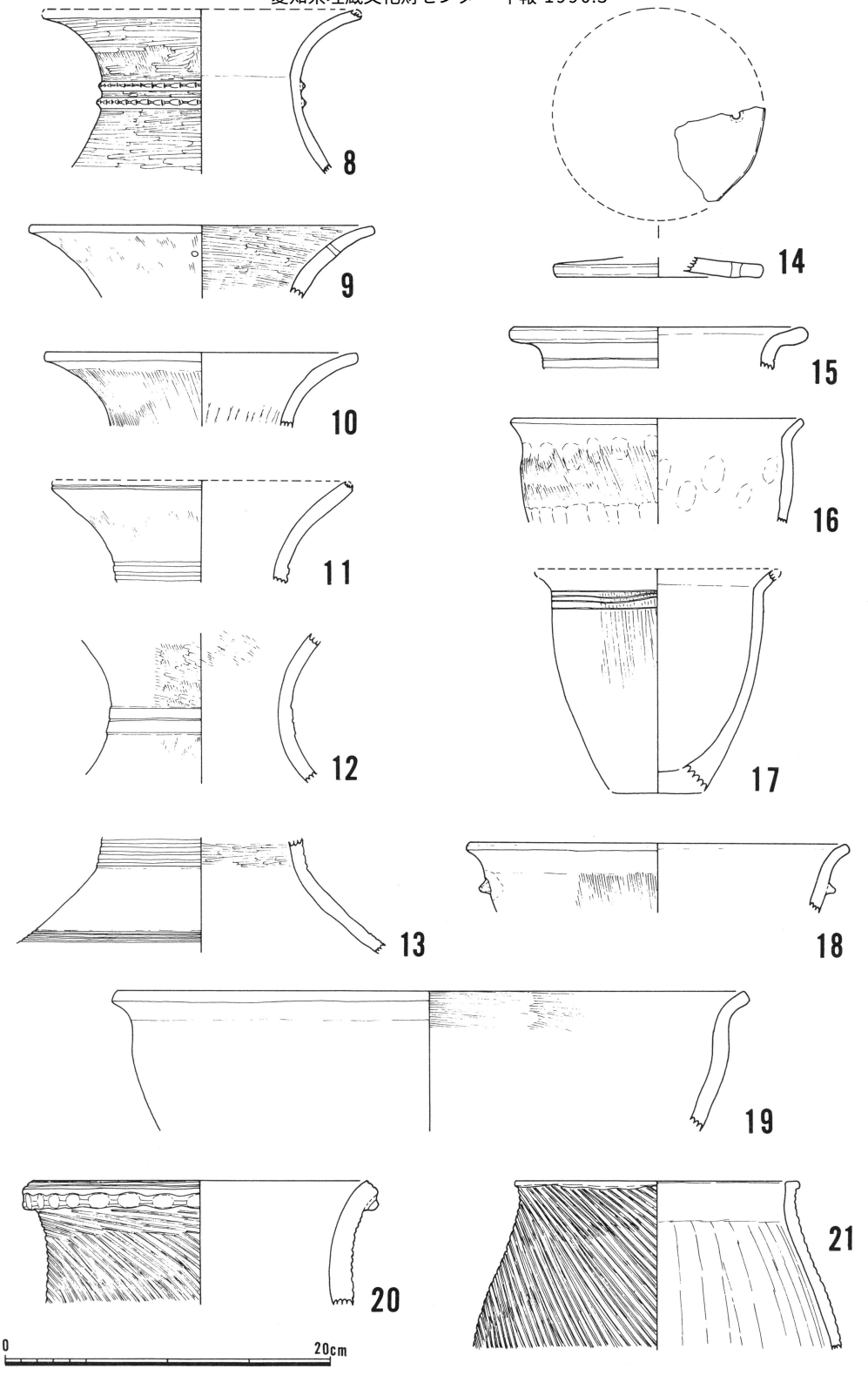
壺A（8～13・22～30）　遠賀川系土器の壺をさす。太い頸部をもち、外上方に大きく広がり、口縁部はやや方形状におわる。頸部に2条の貼付凸帯をもつもの（8・28）があり、8は凸帯上をさらに指圧痕・篦で施文している。11は、口縁端部に篦描沈線を施している。9は、口縁部に穿孔をもっている。11～13・22～25は、頸部・胴部上半に篦描沈線を施し、5条（22）・6条（23）など多条である。頸部に削り出し文様帯（上・下端を切り出して幅広の低い凸帯状のものをさす）をもち、その部位に篦描沈線をもつもの（12・13）がある。26・27は、胴部に貼付凸帯をもち篦の刺突文を施している。29・30は、凸帯の上に指圧痕している。

甕（15～19）　遠賀川系土器の甕をさす。内下方にのびる胴部と外上方にのびる口縁部で口縁端部は方形状におわる。外方に屈曲して端部が肥厚するもの（15）・無文のもの（16）・頸部に4条の篦描沈線をもつもの（17）・頸部下方に2個一対の把手をもつもの（18）・大形のもの（19）などがある。

蓋（14）　壺用の蓋と思われるものが一点出土した。全体の5分の1が残存し、穿孔が1つみられる。偏平で端部は方形状におわる。

壺B（20・31～33）　条痕文系土器の壺をさす。外反する口縁部で端部は方形状におわり、外側の口縁部直下に貼付凸帯をもつ。指圧によるもの（20・32）と篦によるもの（31）とがあり、端部に2条の沈線をもつもの（20）となでているもの（32）がある。器面調整には、横位の条痕（32）・横位と左上がりの単斜条痕（20）・縦の羽状条痕（31）・小形壺の胴部で縦羽状と横位条痕（33）がある。内面はいずれもなで仕上げである。

鉢（21・34～45）　条痕文系土器の鉢をさす。口縁部の形態により、いくつかに類別できる。直立気味の口縁部で内部に突出部をもつもの（34・35）・方形状で面をもつもの（36）・内側に屈曲気味のもの（37）・面取りするもの（38）がある。外反気味の口縁部で端部が方形状におわり刺突文のあるもの（41～43）・無文のもの（40）、端部が丸味をもち刺突文を施すもの（44）、端部が尖り気味で無文のもの（45）がある。21は、外反気味の口縁部で内上方にのび、端部は方形状で外側に折り曲げられている。左上がりの単斜条痕であり、内面は縦方向の器面調整がみられる。器面調整をみていくと、単斜条痕のもの（34～38）・横位と縦羽状の条痕のもの（39～44）・縦羽状条痕のもの（45）



第５図　ＳＤ120上層出土の弥生土器(1)

がある。49・50は、外反する口縁部で端部は尖り気味におわる。端部の外側に箆の刺突文・内側に押引文が施文されていて、器面調整は外側が横位の条痕・内側がなで仕上げである。

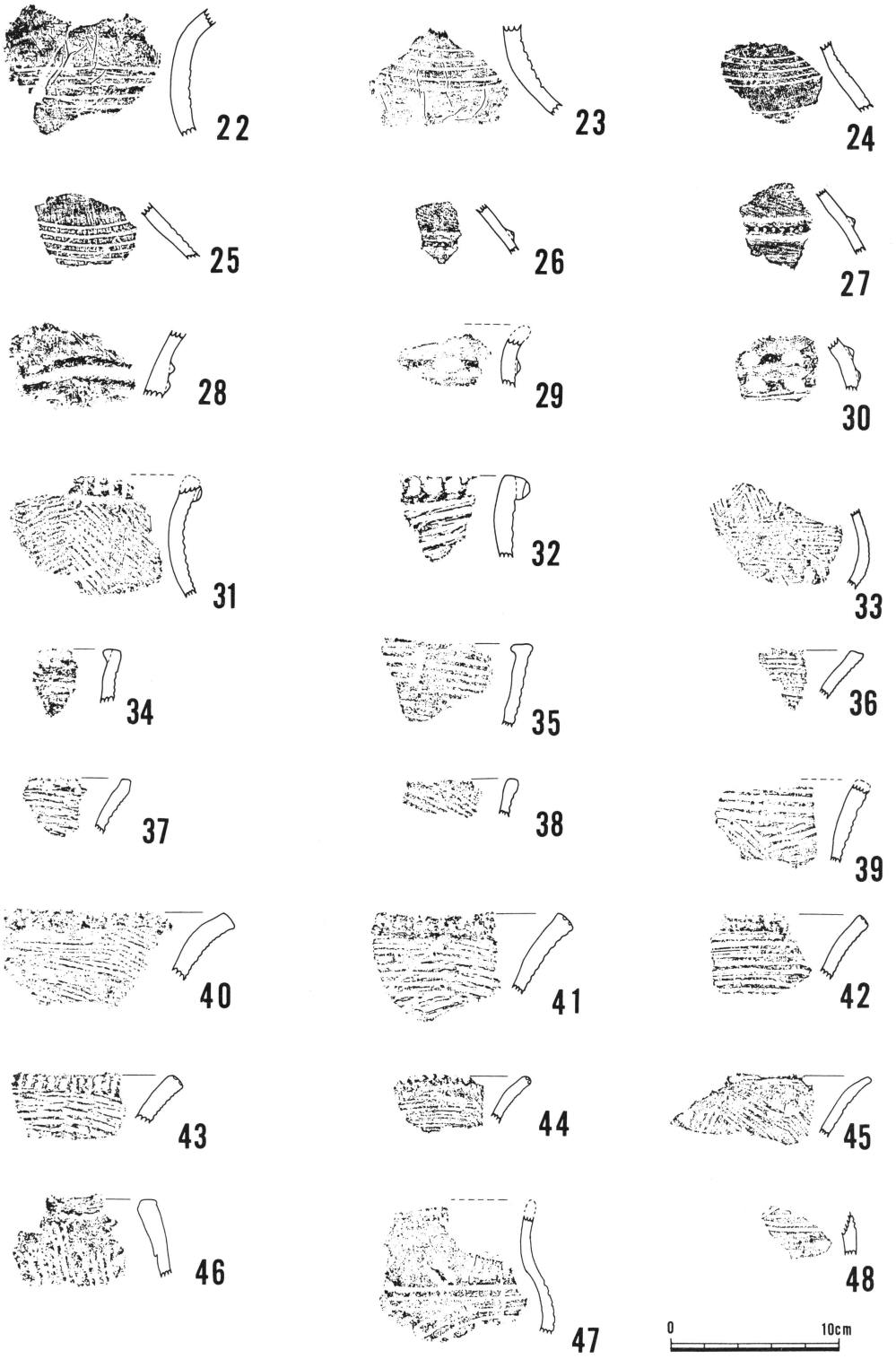
内傾口縁土器（46）　内上方にのび、口縁端部は方形状におわる。外側には縦の条痕・内側はなで仕上げであり、粘土の接合痕がはっきり残る。一宮市尾張病院山中遺跡[3]などに類例がある。

渦巻文土器（47）　口縁部の一部であり、内彎気味で上方にのびる口縁部であり、胴部は膨らみをもつ。胴部に3条の沈線をもち渦巻状に3状の沈線が施文される。一宮市馬見塚遺跡[4]・尾張病院山中遺跡[5]などに類例がある。胎土は赤褐色である。磨滅している。

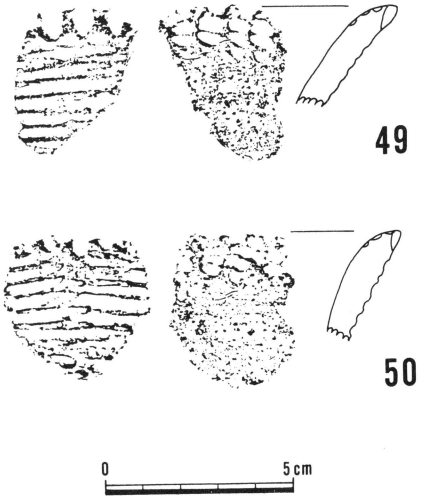
変形工字文土器（48）　胴部の一部であり、変形工字文を構成すると考えられる。外面は研磨され、三角形のえぐりのある変形工字文が施されていたと思われる。内面はなで仕上げである。一宮市二夕子遺跡[6]などに類例がある。

出土遺物をもうすこし検討を加えてみる。従来の編年では、弥生時代前期の遠賀川系土器を細分して朝日第1形式～朝日第2形式[7]、二反地Ⅰ式～Ⅲ式[8]、西志賀1式1層～5層[9]、貝殻山式～西志賀式[10]と研究者によって言われている。朝日第1形式と第2形式の遠賀川系土器の変化は、壺では、頸部・胴部に段や削出凸帯をもつものを主体とするものから、口縁部の外反が強くなり・沈線の多状化がすすみ・貼付凸帯も加わり・幅広い突帯上（削り出し文様帯）に3～4条の沈線を施文するように多様化している。甕では、頸部がゆるやかな屈曲するものから、頸部が強く屈曲して外面に沈線を施すようになる。西志賀1式1層～5層の土器の変化は、層位の堆積により5層に細分できその各層位出土遺物を時期差として捕らえている。器形の変化の推移は上述と同様である。二反地式の場合も、貝層の層序とそれに包含される土器の変遷であり、貝殻山式→西志賀式においても同様であり、そこでは、遠賀川系土器・条痕文系土器という用語に対して第1類～第5類と類別して記述している。つまり、現状の愛知県内では前期を2分・3分する考えであり松河戸遺跡ＳＤ120上層出土遺物は“前期後半”といえる。最近調査された、名古屋市高蔵遺跡[11]の場合では、ＳＤ03から多量の前期の土器が出土し、その一群と比較しても形態・技法に大きな差異をみることはできない。そのＳＤ03を前期末頃としているので、ＳＤ120も前期末には埋没したのであろう。

また、条痕文系土器を取り上げていくと、愛知県内の条痕文系土器の推移は「樫王式→水神平式→岩滑式」と理解されていて、弥生時代の開始を樫王式の時期に置き、前期前半を樫王式・後半を水神平式に併行する[12]と考えられている。ＳＤ120出土の条痕文系土器に



第６図　ＳＤ120上層出土の弥生土器(2)



第７図　SD120上層出土遺物

多様なものが含まれ、問題点としてとりあげてみたい。壺では、貼付凸帯の後に指で指圧痕を施すのが一般的であるが、31のように箆で施文しているものは名古屋市古沢町遺跡１号溝黒土層[13]から出土しているが貼付凸帯に差がみられる。鉢（34・35）の口縁部をもつものは樫王式に相当する古沢町遺跡１号溝貝層出土にもみられ、残存するのか・たまたま混入したのかであろう。さらに、石黒立人氏作成の「《条痕文系土器》主要器種変遷図」[14]と照合すると、そこには載っていない口径がすぼまる鉢21・端部が先細くなる45・端部が丸い44など様々なものが松河戸遺跡で遠賀川系土器と共伴している。それと、鉢49・50について、従来の編年では外面に条痕をもち内面に列点文や波状文が施されるものは「貝田町式か西志賀ＩＩｂ式」と言われていた。ところが、遠賀川系土器に伴って出土した２点は、刻目文と押引文が内外面に施文され、それらとは文様に差異があり、その違いが時期差といえるのかもしれない。しかも、調査区内では、中期の遺構や遺物は検出されていない。弥生時代中期の遺跡ではどこでも出土するような土器であって、この場合はどのように解釈すべきだろうか。春日井市周辺では遺跡の数が少なくて松河戸遺跡近辺の地域色であると断言はできない。あるいは、貝田町式・西志賀ＩＩｂ式にみられる鉢の祖型がこの頃から出現してくるのだろうか。また、条痕文系土器の壺外面に波状文を施文するのがしばしばあり、名古屋市高蔵遺跡や清洲町朝日遺跡など[15]で出土している。ところが、松河戸遺跡ではそれが出土していない。今後に出土するかもしれないが、ＳＤ120の様相が、あるいは尾張平野部での地域色とか時期差の一端を提示しているとも考えられる。

出土遺物の出土地点は、第Ｉ層が16・17・20・25・26・28・34・40・41・45、第II層が10・11・15・24・27・30・31・37・38・44・46、第III層が８・９・12～14・18・19・21～23・29・32・33・35・36・39・42・43・47～50である。

５．まとめ

ＳＤ120と弥生集落　松河戸遺跡周辺の遺跡立地については以前記したこと[16]がある。その概要は、鳥居松段丘が、沖積面下へ埋没する南北に細長い礫層の微高地上に縄文時代早期末から後期にかけての土器や遺構が確認されているということであった。[17]また、それらの微高地に接して、縄文時代中期に形成された埋積浅谷も発見され、松河戸遺跡62Ｅ・Ｆ

・G区では、その微高地を巧みに利用した縄文集落が確認されている。

今回89D区で調査した微地形はそれらとは異なり、東西に帯状に細長く伸びる黄灰色シルト層を基盤とする自然堤防状の微高地に弥生時代前期の集落が立地し、縄文時代晩期に形成された埋積浅谷（SD120）と集落が密接に結びついている状況が窺える。

SD120の下より発見された縄文時代後期と晩期の境界付近に降灰した火山灰より、この微高地は縄文時代晩期以後に約2mを超す堆積のもとに形成され、少なくとも浅谷はこの微高地を掘り込み縄文時代晩期後半には形成された。

このような縄文時代晩期における「庄内川の氾濫」は、この近辺に後背湿地を形成し、初期稲作に適した自然環境を作り出したと考えられる。また、埋積浅谷と初期稲作は密接な関係があったと井関氏により指摘されており、[18]その意味でもSD120と弥生集落との関係は示唆的である。

松河戸遺跡とその周辺　周辺の弥生時代の集落をみていくことにしよう。春日井市内では勝川遺跡・町田遺跡などがあるが、いずれも前期の土器は出土していない。前期の遺跡をみると、春日井市のほかに岩倉市のんべ遺跡・一宮市元屋敷遺跡・馬見塚遺跡・山中遺跡・清洲町朝日遺跡・名古屋市西志賀遺跡・高蔵遺跡など尾張地域で20ばかりの遺跡[19]が確認されている。それらの遺跡を遠賀川系土器と条痕文系土器の固体数の割合[20]で「弥生A型」・「弥生B型」に区分でき、伊勢湾沿岸部と内陸部で傾向がはっきりし、「弥生A型」が沿岸部で「弥生B型」が内陸部である。そうすると、松河戸遺跡は内陸部にあたり、しかも、庄内川の中流域では初めての検出となる。庄内川流域では、下流の西志賀遺跡や月縄手遺跡の沿岸部の遺跡が検出できただけであったのが、中流域まで前期の遺跡が広がってきたことは、さらに上がっていって美濃地域との交流（庄内川水系）を考えていく資料となるだろう。

そして、松河戸遺跡に縄文時代晩期～弥生時代前期に住んだ人々は、おそらく、勝川遺跡に移動したのだろう。勝川遺跡[21]では、弥生時代中期初頭から遺構・遺物が検出されていて、古墳時代前期まで存続する拠点集落である。勝川遺跡では、竪穴式住居跡が32軒・方形周溝墓52基・居住域を囲む溝（環濠）が南東山地区・上屋敷地区の鳥居松段丘上や段丘下の町田地区に立地し、同じく段丘下の苗田地区の溝や掘立柱建物群や木製品貯蔵場など検出されていて、弥生集落を形成している。おそらく、松河戸遺跡に来た人々は、何等かの事情によって、そこを放棄して、勝川遺跡のより安定した場所に定住したと考えられる。あるいは、王子製紙春日井工場の建設に伴って若干の遺物が出土しているのでそちらの方へも移ったかもしれない。弥生時代前期の遺跡の立地がほぼ自然堤防上であるのも、稲作とのかかわりで理解できる。今回の資料が単なる資料紹介でなくて、弥生時代を解釈

するものとなればと思う。

謝辞

本稿を作成するにあたり、石黒立人・赤塚次郎・松田　訓・安井俊則・岡本茂史・土本典生・岡本直久・真鍋雅治・寺沢　薫・森　勇一・井関弘太郎の各氏には御教示・御助言を承り、記して感謝の意を表します。

註

(1)森勇一・伊藤隆彦「愛知県町田遺跡から発見された縄文時代後・晩期の火山灰層について」(『町田遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1989年)
(2)澄田正一・大参義一・岩野見司「馬見塚遺跡」(『新編一宮市史』資料編一　一宮市役所　1970年)
(3)岩野見司・赤塚次郎『尾張病院山中遺跡発掘調査報告』(一宮市教育委員会　1982年)
(4)澄田正一・大参義一・岩野見司「馬見塚遺跡Ｄ地点」(『新編一宮市史』資料編二　一宮市役所　1967年)
(5)澄田正一・大参義一・岩野見司「尾張病院山中遺跡」(註(4)と同じ)
(6)澄田正一・大参義一・岩野見司「二夕子遺跡」(註(4)と同じ)
(7)高橋信明・加藤安信「朝日形式の設定」(『朝日遺跡Ⅰ』愛知県教育委員会　1982年)
(8)久永春雄「東海」(『日本の考古学Ⅲ』1966年)
(9)杉原荘介・岡本勇「愛知県西志賀遺跡」(『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編　1972年)
(10)紅村弘『弥生時代成立の研究』1983年
(11)重松和男編『高蔵貝塚Ⅲ－1985年夜寒地区発掘調査－』(南山大学人類学博物館　1988年)
(12)註(10)に同じ
(13)吉田富夫・和田英雄『古沢町遺跡発掘調査報告書』(名古屋市教育委員会　1961年)
(14)石黒立人「《条痕文系土器》研究をめぐる若干の問題」(『マージナル』５号　愛知考古学談話会　1985年)
(15)愛知考古学談話会編『《条痕文系土器》文化をめぐる諸問題－縄文から弥生－』資料編Ⅰ　1985年
(16)後藤浩一「勝川・町田・松河戸周辺の縄文時代の遺跡立地について」(註(1)と同じ)
(17)縄文時代早期末から前期にかけての土器が松河戸遺跡63Ｌ区において出土した。(後藤浩一・野口哲也「松河戸遺跡」『年報　昭和63年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1989年)
(18)井関弘太郎「弥生時代以後の自然環境」(『岩波講座　日本考古学２』1985年)
(19)松田　訓「比良（月縄手）遺跡」(『年報　昭和62年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1988年)
(20)高橋信明「尾張東北部及び南西部」(『マージナル』５号　愛知県考古学談話会　1985年)
(21)神谷友和「庄内川中流域右岸の弥生遺跡の実態」(註(1)と同じ)